

病気が存在しない世界

札幌市立西岡北中学校 毛利優月 2年

病気。風邪ならともかく得体の知れないそれに罹ったらただただ不運で不幸だ。不摂生がたたる場合もあるだろう。原因不明の場合もあるだろう。看病する家族は大変な思いをし、友達には心配をかける。何より当の本人は自身の内側と戦い共存しつづけるのだ。その心労はいくら家族でも計り知れない。

私はその戦いを目の当たりにしている。母は、私が産まれる前から免疫の難病と戦い続けている。

母の病気は、日光に当たることができない。あのポカポカと温かい陽の光を堪能できないとは。地球上の生物として何とも不憫である。どこぞの鬼のようである。疲れるとすぐに熱を出して寝込むし、握力がなくてペットボトルの蓋も開けられない。毎日たくさんの薬を飲んでいるのに、だ。

病気がなかったらなあ。お日様のした、公園で母と遊べたのに。入院して寂しい思いをすることもなかったのに。弟を励ましていたけれど、私だって泣きたかったんだ。私は病気を恨んでいる。

しかし母はあまり恨みつらみを周りにふりまいたりしない。少し浮世離れした母だ。達観しているのだろうか。長年の病気との付き合いでなれたのだろうか。以前、母が知人にこう言っていた。「病気になった今の方が幸せだ。」と。

私は病気が存在しない世界を望んでいる。母を苦しめる病気なんてない方が良いのだ。それなのに、なぜ母はそう思ったのか。

母は当たり前に出ていた事が発病をきっかけに出来なくなり、戸惑い苦しんだそう。朝、痛みや熱もなく自宅で目覚める事、家族と食卓を囲む事、季節を感じる事、私だったら当たりの事が母にとっては喜ばしい事なのだ。実際母は季節の行事は張り切って準備し、旬の食材を好んで使う。期間限定というワードに弱い。自分が動けるうちにと、私たち子供との時間を大切にしてくれる。みんなと同じような健康を手放した代わりに、母ならではの感性や時間の感覚を手に入れたのではないか。

今の自分に出来る事を楽しみ、時の流れを慈しみ幸せを感じる母を私は尊敬している。

それでも私は願ってしまう。病気が存在しない世界だったら、と。

病気が存在する世界で、今日も母とおしゃべりをし、私のために書き残してくれたレシピで幸せを感じながら母と料理する。